

Title	マロリーのランスロット
Author	吉田, 新吾
Citation	人文研究. 16 卷 2 号, p.123-131.
Issue Date	1965
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	平野ムメヨ教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

マロリーのランスロット

吉 田 新 吾

I

マロリー (Sir Thomas Malory, 1410?-71) の作品—1485年に初めてそれを刊行したキャックストン (William Caxton) の命名にいわゆる *Le Morte Darthur* (『アーサー王の死』), しかし, 1934年により正確, 詳細な Winchester MS. が発見されてから, 実は別個に独立したものとわかった8篇のロマンスを一貫して支える原理は, 人間の理想を騎士道に見, 騎士道倫理を顕揚することである。過ぎ去った騎士道の栄光への郷愁からして, 15世紀後半という中世末期に騎士道を衰退から復活, 讃美することである。

推定によれば, マロリーは, ウォリックシャ (Warwickshire) の騎士で, 暗殺計画, 強盗, 人妻監禁, 強喝, 家畜強奪, 修道院での略奪, 脱獄などの重罪のために, 恐らく獄死まで20年間の大部分を獄中で過ごした無法者であり, 最後の篇の完成を1469-70年として, 8篇はすべて獄中の作であろう。そのような私的生涯との懸隔, 矛盾に戸惑わざるをえないほどに, 作者マロリーは, 徹底的にモラリストである。そういう作者マロリーのモラリストとしての本質をいつくして, マロリー批評のすぐれたものが, *Le Morte Darthur* に付せられたキャックストンの序文である。そこでキャックストンは, マロリーの interesting な面, すなわち, 「多くの愉快で楽しい物語」, 「多くの不思議な物語や冒険」をもって「読んで楽しい」ことを認めながら, はるかに熱心に instructive な面を繰返し強調する。マロリーの書物に見出されるものは, 「仁慈, 高潔, 騎士道の高貴で誉高き行い」であり, 「高貴な騎士道, 礼節, 仁慈, 親切, 勇気, 愛, 友情, 卑怯, 殺人, 憎悪, 徳, 罪」であり, さらにいいかえて, 「騎士道の高貴な行い, 武勲, 武勇, 勇気, 仁慈, 愛, 礼節, 真の高潔」であるという。当然, キャックストンのマロリー刊行の目的は, アーサー王時代の騎士たちが行い, 「それによって誉をえた」「騎士道の高貴な行い, 高潔で徳高き行い」を, 当代貴紳が見習い, 「善きに倣い, 悪しきを棄て」, 「名誉と名声をかちうる」ためということになるのである。

マロリーの掲げる理想は, 地上的騎士道であるといわねばならない。再びキャックストンに聞くならば, マロリーにおいては, 「すべてが, われらを教えるために, われらが悪徳や罪に陥らぬように心掛け, 徳を踏み行い, それによ

ってこの世の名誉と名声をかちえ、短くはかないこの世の後で天国の永遠の幸にあずかるように書かれている。」そしてマロリーの目ざすものは、所詮、彼岸の幸ではなくて、この世の名誉、現世の栄光なのである。ところで、理想が単に地上的騎士道の限界にとどまる限り、それは人間的悲劇の破局を招くことによって破綻を示し、理想としての不完全を暴露する。しかも、マロリーは気づかない。そしてそのような地上的騎士道の理想をランスロット (Lancelot) が具現するのである。

II

マロリーの8篇の作品は、ロマンスの定石どおりに、冒険と恋愛の二要素から成る。それは、武勇と恋愛の讃美ということであるが、裏返して、殺戮と姦通の公然たる奨励であると極言されかねないであろう。事実、後の見地に立ってアスカム (Roger Ascham) はいう、「その書物〔*La Morte d'Arthur*〕の楽しさはすべて、特別な二つの点、すなわち、公然たる殺人と大胆な淫乱に存する。その書物では、何ら正当ないい分もなしにもっとも多くの人殺しをし、もっとも狡猾な策略でもっとも穢らわしい姦通²をやっているものどもが、もっとも高貴な騎士と見なされているのである。」そしてアスカムは、その代表例として、主君アーサー王 (King Arthur) の妃ギネヴィア (Guinevere) の愛人ランスロット、叔父マーク王 (King Marke (Mark)) の妃イズールト (Iseult) の愛人トリストラム (Tristram)、叔母にあたり、ロット王 (King Lote (Lot)) の妃であるモーゴーズ (Morgawse) の愛人ラメロック (Lamerok (Lamerok)) を挙げている。さらに、わたくしたちは、ユーサー・ペンドラゴン (Uther Pendragon) が、後で結婚はするが、コーンウォール (Cornwall) 伯の妃イグレイン (Igraine) (Igraine) によってアーサーをさせたこと、アーサーが、異父姉とは知らずにであるが、ロット王妃モーゴーズとの近親相姦、姦通によってモードレッド (Mordred) をさせたことを知っている。しかし、アスカムの慨嘆は、多分の真理を含みながらも、道学者の偏狭を露呈したものといわねばならない。マロリーの真に意図するところは、紛れもなく武勇の誉と愛の誠実という騎士道的美徳の讃美であるからである。

ところで、マロリーの作品は、すぐれて冒険ロマンスである。『サー・トリストラム・ド・ライオネスの物語』 (*The Book of Sir Tristram de Lyones*) が、代表的にそれを示している。本来、愛を生死の問題として、偉大な悲劇の可能性をはらむトリストラムとイズールトの物語が、ここでは、武勇をもってランスロットに劣らぬ戦士の冒険ロマンスに変わり、黒白の帆も、愛人たちの悲劇

的死もなく、雑多な冒険挿話の何と驚嘆すべき寄木細工に堕していることであろう。果して、それはマロリーの最長篇でしかも最駄作となった。一般に、マロリーにおける冒険の要素は、空想的、浪漫的よりは、戦闘、トーナメント、遍歴などの武勇に重点を置いて戦闘的である。そして叙事詩的ヘロイズムが、最初に制作された『武勲をもって自ら皇帝となった高貴なアーサー王の物語』(*The Tale of the Noble King Arthur that Was Emperor himself through Dignity of his Hands*)と、最後の作『償われぬアーサー王の死についてのもっとも悲痛な物語』(*The Most Piteous Tale of the Morte Arthur saunz Guerdon*)とに顕著であり、かつ全8篇に滲透している。最初の作は、ME 頭韻の『アーサー王の死』(*Morte Arthure*)の散文訳であって、頭韻詩特有のスタイルの力強さと、英雄の武勲を語る叙事詩的ヘロイズムとを受継ぎ、アーサー王を世界征服者として描き上げたものであり、ロマンス作者としての出発において蒙ったそのような影響が、以後決定的、永続的となるのである。冒険の要素を支配的として、恋愛の情緒を犠牲にした点で、そして叙事詩的ヘロイズムを全体に滲透させた点で、マロリーの作品は、ME ロマンス一般の特徴を備えてイギリス的であり、ブリテン物の取扱において、クレティアン・ド・トロワ (*Chrétien de Troyes*)と異なり、ライアモン (*Lazamon*) に似てイギリス的である。

そのように冒険の要素と叙事詩的ヘロイズムが支配的であるのは、フランスのロマンスとアレゴリーを通ずる、そしてチャーサーが摂取、消化した宮廷的伝統から遠いということである。宮廷的、慇懃、優雅という、フランスを指導者と仰ぐ中世ヨーロッパ詩の理想、いいかえれば、宮廷的理想主義に疎遠であるということである。さて、宮廷的理想主義の中心が、宮廷的恋愛であることはいうまでもない。いま宮廷的恋愛のコンヴェンションを、神聖なものとしての女性崇拜、婦人に奉仕する僕としての愛人の観念、愛の誠実の証拠としての恋わずらい、騎士の全人格向上の原動力としての愛の倫理性、愛が愛の神を戴く宗教であることとするならば、マロリーは、それらの熱心な信奉者であるとは必ずしもいえないのである。なるほど、マロリーにも、騎士に当然な婦人への奉仕、献身があり、恋わずらいや愛の倫理性がある。ラーンスロットは、女王ギネヴィア (*Gwenyver(e)(Guinevere)*) を毒殺の冤罪による火刑から、また「荷車の騎士」として、誘拐と不義の訴えによる火刑から、さらに彼との密会の露見による火刑から、三度び身を挺して救う。ギャレス (*Gareth*) は、高慢な婦人の執拗な侮蔑に異常な忍耐を示しつつ、彼女とその姉に奉仕の誠を尽くす。ペリアス (*Pelleas*) は、エタード (*Ettard(e)*) への恋わずらいに懊悩し、垣間見るためわざと捕えられて、馬腹に縛りつけられ、パロミディーズ (*Palo-*

mydes (Palomides)) は、イズールト (Isode (Iseult)) に片想いの炎を燃やして憔悴し、メリアグラランス (Mellyagaunce, Mellyagaunte (Meliagraunce)) は、ギネヴィアへの想いを嘆き、ランスロットは、魔法の呪縛によってエレイン (Elayne (Elaine)) にギャラハッド (Galahad) を生ませたために、ギネヴィアの不興を蒙って、発狂、失踪する。ギャレスやトリストラム (Trystram(e)s, Trystram(ys) (Tristram)) にとって、愛人の一瞥が武勇への拍車であり、パロミディーズのすべての武勇の誉の源泉は、イズールトであり、トリストラムによれば、騎士は愛人でなければ、武勇の働きができず、ランスロットにとって、愛は大いなる武勇である。しかし、マロリーによって女性がほとんど女神として崇拜されることはない。また、マロリーの「荷車の騎士」 (The Knight of the Cart) の章の究極のソースは、クレティアン・ド・ドロワの『ランスロ、荷車の騎士』 (Lancelot, ou Le Chevalier de la Charrette) と、13世紀のフランス散文の『ランスロ』 (Lancelot) とであるが、クレティアン・ド・トロワの作にある女性の絶対専制に対する騎士の絶対臣従は、フランス散文『ランスロ』でもマロリーでも消失し去っている。そしてマロリーでは、愛がたしかに武勇への拍車ではあるが、全人格向上の原動力として認められてはいない。さらに、愛が宗教であるという意識は、マロリーにはない。要するに、ヴィナヴァー、チェインバースの見解に大体従って、わたしたちは、マロリーが宮廷的恋愛の繁文縟礼を理解しなかったか、共鳴しなかったと見るべきであろう。しかし、重要なことに、特にランスロットに見られる愛の誠実は、まさしく宮廷的恋愛の精神なのである。そしてマロリーにおいて、冒険の要素が支配的であるにかかわらず、愛が重大である。地上的騎士道というマロリーの掲げた人間の理想にとって、愛が生命的で致命的なものであるからである。

III

ランスロットは、マロリーにとって、完全な騎士、完全な愛人として人間の理想の具現である。「世界一の騎士」 (the beste knyght of the worlde)⁵ であり、「世界中の騎士の華」 (the floure of all knyghthode of the worlde)⁶ である。通常慇懃、礼節をもって騎士道の亀鑑とされるガーウェイン (Gawayne (Gawain)) すら犠牲にして、マロリーが最大の共感をもって描き上げた人間の理想像である。エクター (Ector) のランスロット追悼の辞に聞こう、

「ああ、ランスロット、あなたはすべてのキリスト教騎士の第一人者であった。手練のほど天下無敵といま断言してはばからぬランスロット殿、そこにあなたは眠る。あなたは楯をとってもっとも慇懃な騎士であった。

あなたを愛するものに対して、馬にまたがる騎士のうちもっとも誠実な友であり、罪ある人間で、婦人を愛してもっとも誠実な愛人であり、剣をもって打ってもっとも情に厚い人であった。並いる騎士たちのうちもっとも美男子であり、広間で貴婦人たちと食事してもっとも柔和、もっとも礼儀正しい人であり、不倶戴天の敵に槍を構えてもっとも猛き騎士であった。」

ランスロットは、騎士として最高の武勇と最大の仁慈の心を兼ね備えて、もっとも強く、もっともやさしい。そして愛人としての誠実、献身において何びとにもまさる。『湖のランスロットの高貴な物語』 (*The Noble Tale of Sir Launcelot du Lake*) で、ランスロットが、結婚しないのは、妻が武芸の邪魔となるからであり、愛人との快樂を拒むのは、神を恐れるからであり、また武勇の妨げを避けるためであり、「冒険の騎士は、姦通、好色の徒であってはならぬ。」⁸というのを、ラミアンスキーは、ランスロットとギネヴィアの関係が、まだここではプラトニック・ラヴの段階にあった証拠とするが、愛を武勇への拍車、騎士道的美徳の源泉とする宮廷的恋愛の観念と矛盾するこの言葉を、ヴィナヴァーの¹⁰ように、この物語を書くときマロリーがその観念を知らなかったという推定に帰することもできるであろうが、むしろ秘密厳守という、宮廷的恋愛において重要とされる掟に従って、ギネヴィアとの愛の秘密を厳守するためのいい逃れと解すべきであろう。そしてランスロットが、魔法に呪縛されてエレインにギャラハッドを生まれ、ギネヴィアに叱責されて発狂、放浪するのも、彼に焦がれ死ぬ「アストラットの美しい姫」 (*The Fayre Maydyn off Astolot (The Fair Maid of Astolat)*) エレイン (Elayne (Elaine)) の求愛を拒むのも、ギネヴィアへの献身の証拠である。ランスロットは、身を挺して三度びギネヴィアを救い、愛を貫き、愛に死する。マロリーは、ランスロットとギネヴィアの場合のように、昔のアーサー王時代の愛は、五月のように咲きにおう真実、誠実な愛、“trew love,” “vertuose love”であったが、当今の色恋は、夏と冬のように熱し易くさめ易い “unstable love”¹¹であるという。たしかにランスロットのは、死にいたるまで誠実、まさしく宮廷的恋愛の精神に貫かれる愛である。

IV

以上のようにランスロットが、完全な騎士、完全な愛人として、人間の理想を具現するのは、地上的騎士道の限界内でのことである。聖杯探求という天上的騎士道の世界に入るや、「世界一の騎士」¹²は、もはやランスロットではなくて、ギャラハッドなのである。神的な次元での人間の完全、真の意味での

人間の理想を体現するのは、ギャラハッドなのである。ランスロットは、「世俗的欲望のために世俗的冒険を求めたときに」¹³無敵であった。「俗世の罪ある人のうちで騎士道に無双である。」¹⁴神から最大の恩寵、この世の誉を恵まれながら、神に謝せず、武勇の大部分は、誉を得て女王の愛を得るため、この世の誇りと快樂と虚栄のためであって、神のためではなかった。地上的騎士道の世界では、愛の誠実という美德の権化であったが、いま天上的騎士道の世界では、24年間大罪に穢れた悪魔の僕と見なされる。「石よりも固く、木よりも苦く、無花果の葉よりも裸」¹⁵と評される。罪を棄てようとせず、かたくなであり、罪あるところに甘さなく、よき思いもよき意志ももたず、好色に穢れているということである。

さて、聖杯とは、元来食物を生み出す魔法の器として、ケルト起源の豊饒の象徴であったものをキリスト教化したものであり、キリストが最後の晚餐で、「これわが体なり。これ…わが血なり。」といったときの酒杯であり、襟刑のときのキリストの血を受け、アリマタヤのヨセフ (Joseph of Arimathea) がブリテンへ持参したといわれる聖器であり、化体 (transubstantiation)¹⁶の奇蹟、聖餐 (Eucharist) の秘蹟の象徴となったものである。そして聖杯探求は、神を求める人間の魂の努力、禁欲主義と神秘主義の、本来世俗的なロマンスによるキリスト教的シンボリズムである。当然、聖杯探求の成就者は、何よりも先に童貞の純潔、そしてそれなくしては得られぬ完全な霊的清浄、あらゆる罪の穢れからの無垢をもって、霊的に完全な騎士に限られるのである。マロリーにおける聖杯探求の選士のうち、ガーウェインは、信仰薄き騎士として失敗し、ランスロットは、ほとんどしとげて果さず、ギャラハッドが、パーシヴァル (Percivale (Perceval))、ボーズ (Bors) とともに成就する。パーシヴァルは完全に童貞、ボーズは一度肉欲に穢れた以外は純潔であり、ともに美女に化けた悪魔の誘惑に打勝つ。しかし、聖杯のヴィジョンの法悦に浸るのは、ひとりギャラハッドのみである。その歓喜から、ギャラハッドは、常住見神の至福にあずかることを願い、この惨めな浮世を忌んで、死を祈り、昇天する。童貞、純潔、清浄をもって霊的完全の騎士なのである。

しかし、マロリーは、ランスロットをして、罪を悔改めた人間に許される限り、聖杯探求に成功させる。最大の共感をもって描く地上的騎士道の理想像に、天上的騎士道の世界でも最大限に所を与える。もともと、ランスロットは、いくら罪を悔改めても、所詮、童貞、純潔ではありえず、したがって究極的な霊的完全から除外されるのであり、最高の法悦、神との神秘的霊交は許されない。病人が聖杯で癒されるのを見るが、夢現のうちにてであり、聖杯のある

礼拝堂には入れない。コーベニック (Carbonek, Corbyn (Corbenic)) 城で聖杯を見るが、聖杯のある室に入ることを許されず、室に入るや、倒れて、24日間死んだと同然である。そこに、ギャラハッドという、地上的騎士道の亀鑑ラーンスロットを父とし、聖杯城主ペリーズ (Pelles) 王の娘エレインを母とし、純潔、清浄をもって父にまさる天上的騎士道の選士、救世主的英雄の存在理由があるのである。元来、13世紀フランス散文の『聖杯探求』(La Queste del Saint Graal)¹⁷では、ラーンスロットは、恩寵に価すべく努力して卑下させられる地上的騎士道の見本であった。そしてマロリーの『聖杯物語』(The Tale of the Sankgreal)でも、ラーンスロットは、悔改め、苦行し、祈り、日夜神に仕える。しかし、探求で見たもので満足し、大業を成就したという感じでアーサー王宮に帰る。究極の失敗よりは、比較的な成功を意識しているのである。フランス散文の『聖杯探求』は、恩寵の教義に依拠し、その解義でない頁や行はほとんどなく、キリスト教の禁欲主義に騎士道を従属させた。しかるに、その要約であるマロリーの『聖杯物語』は、神学的、霊的なものの多くを省略してしまった。本来ラーンスロットの愛とギャラハッドの純潔として提示された、地上的と天上的、人間的と神的、アーサー王宮の所在地キャメロット (Camelot) と聖杯の城コーベニックの対立の意識が、ここでは稀薄になってしまっている。結局、マロリーの『聖杯物語』は、十分な宗教的昇華をとげていないのである。

聖杯探求が終わった後の物語、『サー・ラーンスロットと女王ギネヴィアの物語』(The Book of Sir Launcelot and Queen Guinevere) と『償われぬアーサー王の死についてのもっとも悲痛な物語』において、マロリーは、地上的騎士道の理想としての讚美に逆戻りする。ラーンスロットが、「探求でした約束と完全の生活を忘れて」¹⁸、女王への愛を復活させる。好色の大罪として悔改められたラーンスロットの愛が、再び騎士道的美徳となるのである。もともと、13世紀フランスのアーサー王伝説散文ロマンス群、すなわち、「普及物語群」(The Vulgate cycle)では、聖杯探求が全体の中心をなすのであり、聖杯が円卓を否定するためにあり、円卓は聖杯の理想のアンティセシスであり、地上的騎士道は天上的騎士道に照らして非難されるためにあり、宮廷的恋愛は神的真理を支えるためにあった。しかるに、マロリーでは、聖杯探求が全体の中心とはならず、円卓は善と美の理想の象徴であり、地上的騎士道は天上的騎士道に劣りはしても、賞讃されるためにあり、宮廷的恋愛はそれ自身として騎士道的美徳なのである。マロリーは、フランス散文ロマンス群の本質を見逃した。それが理想の反立として逆用した地上的騎士道を、マロリーは真正面に理想として掲げるのである。

しかし、ラーンスロットとギネヴィアの愛が、アーサー王国の滅亡という破局の究極原因となる。それを発端として、アーサー王伝説の世界が、不可避の必然とみごとな劇的構成をもって悲劇的結末へと直進する。ラーンスロットが、密会の現場を襲われ、女王を火刑から救うとき、彼を熱烈に敬愛するギャレスを知らずに殺したことから、その兄ガーウェインが、ラーンスロットのもっとも誠実な友から不倶戴天の敵に一変する。復讐の鬼と化したガーウェインの頑強な主戦論のために、女王を擁するラーンスロットに対する王の挑戦が不可避となる。ローマ教皇の仲介で、ラーンスロットが女王を王に返す。留守をあずかって王位を篡奪し、女王に結婚を強要するモードレッドとの戦に、円卓騎士団は全滅し、王はモードレッドを討取るが、重傷を負い、アヴァロン (Avlylon (Avalon)) の谷に消える。女王は尼となり、ラーンスロットは隠者となる。女王のラーンスロットにいうとおりである。「あなたとわたしのために王侯騎士の華が滅んだのです。」¹⁹ もともと、フランス散文ロマンス群では、聖杯探求が中心である以上、地上的愛に由来する王国の滅亡、地上的騎士道の敗北は、当然のことであった。しかるに、マロリーは、聖杯探求を全作品の中心とはせず、地上的騎士道という理想の讃美に終り、偉大な王国の滅亡にある破局の悲劇美と叙事詩的ヘロイズムに陶醉して果てる。破滅に導く愛を、死までひたすらに貫き通す誠実の愛として賞讃すべき騎士道的美徳と確信する。マロリーの『償われぬアーサー王の死についてのもっとも悲痛な物語』は、13世紀フランス散文の『アーサー王の死』 (*Mort Artu*) と ME スタンザの『アーサー王の死』 (*Le Morte Arthur*) に材を仰ぎつつ、その伝統的物語を彼自身の悲劇感をもって再解釈し、多くの独創を加えた作品であり、原典のいずれにもある隠者ラーンスロットの宗教的救いは、マロリーにはない。マロリーでラーンスロットが隠者となるのは、神への愛のためではなくて、女王への愛のためである。世を捨てて完全の生活に身を委ねた女王のために、それに倣うのである。そして後悔するのは、神に対して犯した罪についてではなくて、王と女王、主君と愛人にかけての悲しみについてである。女王の死のゆえに、ラーンスロットは、病み、飲食を断ち、王と女王の墓に這いまろぶ。女王への絶ちきれぬ愛に憔悴して果てるのである。ME スタンザの『アーサー王の死』²⁰ で、ラーンスロットが病んで死ぬのは、煩悩を絶って、苦行と祈りの宗教的勤めに励んだためであり、女王の死は、後の出来事である。結局、マロリーは、人間の愛の崇高な物語の大団円にふさわしくラーンスロットを死なせて、人間的である。

マロリーは、宮廷的恋愛を誠実のゆえに賞讃すべき騎士道的美徳とすることに終る。しかし、実は、その誠実こそ悲劇に導くもの、天上的騎士道の立場

より見るならば、情熱に魂を奪われ、神を忘れ、神に背き、地獄に墮すべき大罪なのである。地上的騎士道の本質的矛盾が、そこにある。しかも、マロリーは、それを見抜かぬままである。聖杯探求における天上的と地上的の対立にすら不徹底であったことを思えば、さもありなんことである。マロリーは、天上的騎士道の世界をいわば垣間見たにすぎず、結局、地上的騎士道を理想として讃美することに終るが、実は、人間の愛が破滅を招くことによってその理想が破綻することを立証しているのである。理想を讃美して、実は、理想の破綻を証明しているのである。しかも、自分が何をしているかに気づかぬままにである。ギャラハッドの天上的騎士道でなく、Gawain-poetにおける神的なものに統御される騎士道でなく、単に地上的な騎士道の限界では、完全の理想が到達されないことを証明するという結果になっているが、しかも、その真理を洞察しえぬままにである。まさしくアイロニーである。

注

- ¹ "Caxton's Preface," in *The Works of Sir Thomas Malory*, ed. Eugène Vinaver, 3 vols., Oxford, 1947, pp. cxi-cxv. ² Roger Ascham, *Scholemaster*, 1570.
³ Vinaver, *Malory*, Oxford, 1929, p. 51. ⁴ E. K. Chambers, *Sir Thomas Malory*, English Association Pamphlet No. 51, 1922, p. 14. ⁵ *The Works of Sir Thomas Malory*, ed. Vinaver, p. 792, etc. ⁶ *Ibid.*, p. 470. ⁷ *Ibid.*, p. 1259. ⁸ *Ibid.*, p. 270. ⁹ R. M. Lumiansky, 'The Relationship of Lancelot and Guenevere in Malory's "Tale of Lancelot",' *Modern Language Notes*, lxviii, 1953, pp. 86-91.
¹⁰ *The Works of Sir Thomas Malory*, ed. Vinaver, "Commentary," p. 1403.
¹¹ *Ibid.*, pp. 1119-20. ¹² *Ibid.*, p. 795, etc. ¹³ *Ibid.*, p. 896. ¹⁴ *Ibid.*, p. 930.
¹⁵ *Ibid.*, p. 895. ¹⁶ See L. A. Fisher, *The Mystic Vision in the Grail Legend and in the Divine Comedy*, New York, 1917. ¹⁷ *La Queste del Saint Graal* と、それを含む The Vulgate cycle (*L'Estoire del Saint Graal, L'Estoire de Merlin, Lancelot (del Lac), La Queste del Saint Graal, La Mort Artu*; 1215-30) については、Vinaver, *Malory*, "Camelot and Corbenic," pp. 70-84; *The Works of Sir Thomas Malory*, ed. Vinaver, "Commentary, The Quest of the Holy Grail," pp. 1521-29; Jean Frappier, "The Vulgate Cycle," in *Arthurian Literature in the Middle Ages*, ed. R. S. Loomis, Oxford, 1959, pp. 295-318 に負う。 ¹⁸ *The Works of Sir Thomas Malory*, ed. Vinaver, p. 1045. ¹⁹ *Ibid.*, p. 1252. ²⁰ See *Le Morte Arthur*, ed. J. D. Bruce, Oxford, 1959, EETS ES LXXXVIII, 3826-3961.